

# 都留文科大学意見交換会

2022/8/23

# 現況と将来展望 藤田学長

- 公立大学は99大学のうち89が公立大学法人  
⇒18歳人口の急激な現象に伴って急増  
=私立大学の疲弊が顕著
- 小規模な一般市立大学でありながら3500名の学生数を誇り  
2000～5000名の生徒数の16大学の中位程度の規模  
全国から生徒が来る
- 志願者数は約1割減少（全国的に）  
⇒コロナの影響も大きい（併願数の減少も見られる）
- 私立大学の志願者数倍率なども減少している

# 現況

- 都留文科大学の志願者数は毎年800名ほどを維持しているが、近年は志願倍率が6 ⇒ 5に減少している。（コロナ影響も）
- 文科省：公立大学の志願倍率の合計志願率（R2）6程度で都留文科大学も平均程度となっている。
- 卒業生の進路では就職状況は優良で近年進学も増加傾向である。  
5割の学生が各地の地元で就職する傾向がある。  
⇒ 学校教育学科：地元で教員になることが影響
- 教員一人当たりの学生数が多い（30名）他大学など医学などを要する大学はこの人数が少ない。

# 将来展望と課題

- 経済支援の必要性が高い（世帯年収が少ない学生が多い）
- 国際性：カリフォルニア大学、リジャイナ大学が近年無くなった。
- 協定校を増やし国際体験者を200名に拡大したい。  
⇒奨学金など支援を拡充したい
- 地域協働事業は40程度とかなり多く評価も高い
- 小規模だが評価できる大学ランキングによると都留文科大学は全国7位に位置している。（高校の先生が勧めたい大学）

# ヴィジョン

- 国際性、卓越性、地域性を連携しブランディングしていきたい

# 学部・学科改編について 田中副学長

- 大学教育の転換  
教育者本位⇒学修者本位の教育へ（高等教育的になる）
- 大学淘汰時代の競争  
18歳人口の減少・文系大学の存在意義の確認  
⇒人間理解＝ナラティブモードの教育推進
- 都留文科大学の構成上の課題  
目的が不明瞭な学部構成⇒学科連携が難しい

# 改革が目指すもの

- 目標  
教員からのボトムアップ議論  
⇒ 学問とリアルな活動をしつつ理解していく  
⇒ ICTリテラシーを身に着け方向性を見通す身体知、暗黙知、レジリデンスを備えた人材の育成  
地域連携をしていく事で育成につなげる
- 経営上の効果  
6号館の新設し教育の場を有効活用する  
⇒ 志願者数を増やすだけでなく、質と維持の向上をしつつ志願者数を確保する

# 改革の基本方針

- 学部改編  
学科連携を円滑にしたり、副専攻制の導入
- 全学的なカリキュラム改訂  
強みの明確化（オンラインなどとは違うもの）  
⇒ 地域連携、フィールドワーク、多面的な交流
- 文学部に日本学（Japanology）を検討中  
新しい日本語が生まれている／作り出すことも学ぶ
- 比較文化、地域社会学科を教養学部に移設  
副専攻として連携し学べる

# 施設の整備状況について 事務局長

- 複合型プロジェクト  
2022年6月決定：国際交流センター、地域交流センターなどを  
設置予定

# 意見交換

- 複合型施設の寮の話は？  
⇒再検討して交流拠点に変更（いったん白紙）
- 国際教育学科以外でも副専攻でIB資格を取れるのか？  
⇒その予定
- 6号館  
⇒ラーニングコモンズなど自立型の学修施設
- 複合型施設  
⇒地域交流研究センターと国際交流センターが移設  
⇒基本的には研究施設

# 意見交換

- 地域交流に対する考え方  
⇒ 大学発信での交流として捉えている。大学主催の勉強会など
- 教員が少ないが？  
⇒ 誇張された報道などで教員志望者も減っている。教員の働き方改革を推進してもらいたい。また、強い学生の養成も同時にひちようだと考える。
- 留学  
⇒ 専門機関と提携し学校数が増える予定  
⇒ ネブラスカ大学の連携を提言

# 意見交換

- 副専攻などの科目履修  
⇒地域の方などが科目履修でスキルアップできる制度などを提言し、検討に入ることになった。
-